

接触回数の増加による会話中の沈黙と話題選択への影響
— 日中接触場面と日本語母語場面の分析 —
The Impact of the number of meeting sessions on Silence and
Conversation Topic Selection
- Comparison between intercultural and intracultural settings in
Japanese conversations -

趙 鵬群, 巽 智子
 Pengqun Zhao, Tomoko Tatsumi
 神戸大学
 Kobe University
 206c301c@stu.kobe-u.ac.jp

概要

本稿では、接触回数の増加による会話中の沈黙と話題選択への影響を検討した。日中接触場面と日本語母語場面の初対面の大学生ペアを対象に、週に1回の自由会話を4週間実施した結果、接触回数の増加によって話題転換時に沈黙が行われる確率に差があるとは言えなかったが、日中接触場面では話題転換時に沈黙が行われる確率が有意に高いという結果が得られた。また、両場面における会話参加者の話題内容にも違いが観察された。

キーワード：話題選択, 初対面からの継続自然会話, 日中接触場面, 異文化コミュニケーション

1. はじめに

日本に来る留学生の増加に伴い、キャンパスにおける異文化間交流の機会も増えてきたが、日本人学生と外国人留学生との間の交流が思うように円滑に進んでいないことが現状である(小松 2016)。その原因について、大津(2009)や楊(2011)は、接触場面において、文化の差異による不適切な言語行動が、会話の参加者間の親密化に影響し、人間関係を損ねる要因になると指摘している。

様々な言語行動の中でも、会話を円滑に進めるための適切な話題選択は特に重要な役割を果たしている。これまでにも会話における話題選択に関する研究が行われてきたが、そこでは初対面会話が対象となることが多い(三牧, 1999; 張, 2006; 趙, 2014; 楊, 2011 等)。しかし、初対面の接触後、再会して行われる二回目の会話やそれ以降の会話に関する考察は少ない。現実の人間関係は連続的に発展するものであるため(山本ら

2008)、接触回数が増えるにつれ、会話における話題選択の仕方に変化が生じる可能性がある(方 2020)。つまり継続的な対人関係形成の過程に対する研究が必要である。

そこで、本稿は、2022年2月提出の修士論文「日中接触場面と日本語母語場面における話題選択と話題導入プロセスに関する考察—初対面からの継続会話の分析—」のデータを用いて、その内容を一部発展させ、対人関係の初期段階において、日中接触場面と日本語母語場面における話題選択にどのような違いが出るかを検討する。

2. 先行研究と研究課題

渡部(2018)では、多くの大学生が初対面では話題が尽くしてしまい、2回目は何を話していいかわからないために、対人不安の一種である二度見知りを生じると指摘している。つまり、2回目以降の会話では話題の産出が初対面場面より難しいことが考えられる。

また、方(2020)は日本語母語話者同士の初対面から4回に渡っての会話を分析対象とし、日本語母語場面における話題選択の内容の変化を明らかにした。その結果、「初対面会話では、会話参加者の個性や組み合わせには関わらず話題選択に高い共通性があったが、2回目以降の会話の話題選択は、初対面と比べ、会話参加者の関心に依って多様性が見られた」(方 2020:p.89)。

一方、日中接触場面(CJ)では会話参加者双方が異なる言語的・文化的背景を持つため、共通する話題リソースが少なく、日本語母語場面(JJ)の会話より話題の選択がさらに難しいと考えられる。

以上のことをふまえ、本研究では以下の研究仮説を設ける。

仮説 1：初対面場面よりも 2 回目以降の会話においての話題の産出が難しくなる。

仮説 2：JJ 場面よりも CJ 場面においての話題の産出が難しくなる。

仮説 3：CJ/JJ 場面の会話において会話参加者の話題内容には差が見られる。

3. 研究方法

本研究では、中国語を母語とする上級日本語学習者と日本語母語話者による接触場面 (CJ)、日本語母語話者同士による日本語母語場面 (JJ) で採集したそれぞれ 2 組の初対面から同じ人と 4 回にわたる継続会話を録音、録画し、文字化したデータを分析資料とする。分析に当たって、両場面の会話参加者の条件を次のように統制を行った。

会話参加者はすべて 21~23 歳の女性で同じ大学に通うお互いに面識のない 4 年生とした。また、個人差を小さくするために、2 名の母語話者 (J1, J2) は日中接触場面 (CJ)、日本語母語場面 (JJ) の両方に参加するように組み合わせた。会話の参加者の内訳を表 1 に示す。

表 1 調査協力者の属性と組み合わせ

グループ 1	接触場面	J1	CJ1
	母語場面	J1	J3
グループ 2	接触場面	J2	CJ2
	母語場面	J2	J4

4. 結果

4.1 話題の産出の難しさについて

話題産出の難しさを調査するために、Audacity の Silence Finder 機能を用いて、話題転換時に行われた 3 秒間以上の沈黙を機械的に抽出し、分析対象とした。初対面会話から 4 回目の会話において、話題転換時に 3 秒間以上の沈黙が行われた確率を図 1 に示す。

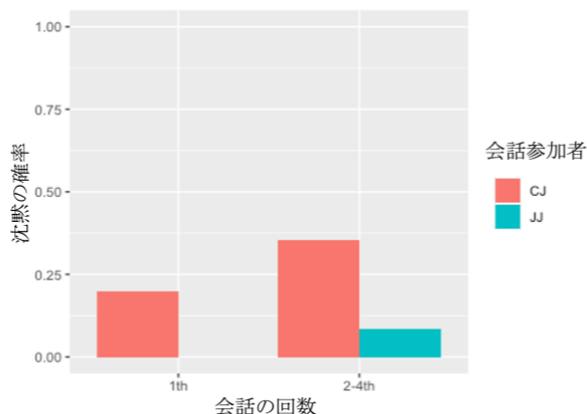


図 1 CJ/JJ 場面における 1 回目と 2 回目以降の会話における話題転換時の 3 秒間以上の沈黙の確率

図 1 から、話題転換時に 3 秒間以上の沈黙が行われた確率は初対面場面よりも 2 回目以降の会話の方が多くなることがわかるが、二元配置分散分析を行った結果、初対面場面と 2 回目以降の会話では、有意差が見られなかった ($p=0.201$)。

一方で、話題転換時に 3 秒間以上の沈黙が行われた確率は JJ 場面よりも CJ 場面の方が多くなった ($F(1,132)=15.214, p<.001$)。なお、両要因の有意な交互作用は見られなかった ($p=0.441$)。

また、3 秒以上の沈黙時間という基準を 5 秒以上に变えて話題転換時に沈黙が行われた確率について調べてみた結果、話題転換時に 5 秒間以上の沈黙が行われた回数は JJ 場面が 0 であったのに対して、CJ 場面の方が初対面場面の会話において 2 回、2 回目以降の会話において 11 回見られた。つまり、JJ 場面より CJ 場面では話題転換時に沈黙が行われる時間が長いと言えるだろう。

下記の会話例 1 (J2, CJ2 の 4 回目の会話より) はその一例である。会話例 1 では、CJ2 は先行話題の「バイト先のプール」についての相手の意見に「はい」と相づちを打ち (4 行目)、話題が終了した。その後 J2, CJ2 のどちらも新しい話題を導入しないまま、15 秒の沈黙が生じている (5 行目)。そして、CJ2 から話題が導入される様子が見られないため、J2 は沈黙を破り、質問で「次の話題」という話題を導入した (6 行目)。それにも関わらず、7 行目では、笑いやフィラーの後に、また 3 秒間の沈黙が生じ、話題の選択に困難が生じる様子が窺えた。

会話例1 バイト先のプール → 次の話題

1	J2	なので、ちょっと九月、夏休みが終わる、9月以降が多分空いてると。
2	CJ2	はい。
3	J2	ぜひまた遊びに来てください。
4	CJ2	はい。
5		《沈黙 15 秒》
6	J2	時間があと1分あるんですけど、何話しますか？
7	CJ2	<笑い> うーん 《沈黙 3 秒》
8	J2	はい、<2人で笑い> 今日はこんな感じですかね。
9	CJ2	はい。
10	J2	はい、すいません、なんか、じゃ、また猫カフェ、もしも行ってみたら、私も行くかもしれないんで、もしも行ったら、はい、感想いいます。
11	CJ2	<笑い> はい。

このような話題転換時に長い沈黙が生じ、会話参加者双方は何を話せばいいかわからないようなやりとりは日本語母語場面では一例も見られなかった。また、初対面場面より2回目以降の会話でこのような沈黙が多く見られた。このような例は、仮説1（初対面場面よりも2回目以降の会話においての話題の産出が難しくなる）と仮説2（JJ場面よりもCJ場面においての話題の産出が難しくなる）を支持する1つの材料となり得る。

4. 2 話題内容の比較

三牧(1999)の話題カテゴリーの分類を参考に話題の内容を区分し、分析を行った。今回はデータの量的な制約から記述分析のみにとどまるが、初対面場面では、CJ/JJ場面の話題選択に共通性が見られ、2回目以降の会話では、多様性が見られた。

具体的に、初対面会話では、お互いについての背景知識がないため、CJ/JJ場面のいずれの会話においても大学における所属や専門などの話題が選択され、お互いの基本情報の交換が行われていた。また、参加者は同じ大学4年生であるため、互いに身近な話題である大学生活や進路についての話題が共通して取り上げられていた。それに対して、接触回数が増加するにつれて、選

択される話題の内容が分かれる傾向が見られた。

また、CJ/JJ場面では、大学生活の話題がともに一番多く選択されたが、CJ場面では、大学生活（全45話題中12）の次に、言語学習に関する話題が多く取り上げられた（全45話題中11）。それに対して、JJでは、大学生活の話題が集中して選択される傾向（全66話題中23）があり、言語学習に関する話題が取り上げられなかった。

さらに、接触回数の増加に伴い、JJ場面では家族や恋愛などの私的なことに関する自己開示が行われ、親密化する様子が見られたが、CJ場面では、会話の回数が増えても、そのような自己開示は見られなかった。

5. 考察

研究課題について、本研究で明らかになったことを以下にまとめる。

まず、接触回数の増加によって話題転換時に沈黙が行われる確率に差があるとは言えなかったが、CJ場面では話題転換時に沈黙が行われる確率が有意に高いという結果が得られた。これは、JJ場面の双方の参加者は類似した言語的・文化的背景を持ち、初対面会話だけでなく、2回目以降の会話においても、何が適切な話題であるかが推測されやすいため、新しい話題を選択することができる。一方、CJ場面の双方の参加者は異なる言語的・文化的背景を持つため、適切な話題を選択することが難しいと考えられる。

また、CJ/JJ場面の会話において、初対面場面では、話題選択に共通性が見られ、2回目以降の会話では、多様性が見られたのは方(2020)と同様の傾向であるが、4回の会話全体的に見ると、CJ/JJ場面の会話参加者の話題内容には差が見られた。CJ場面では、言語学習に関する話題が多く取り上げられる傾向が見られたのに対して、JJ場面では、言語学習に関する話題が取り上げられなかった。これは、CJ場面において、話題選択をする時に、異なる言語的・文化的背景を持つ相手を持つ話題リソースに配慮しながら、双方が重なっていると思われる範囲の中で話題の選択が行われていると考えられる。

今後、同じ状況での中国語母語場面における女子大学生の会話との対照や、データを増やした上で話題選択について定量的な検証をする必要性がある。

参考文献

- [1] 大津友美 (2009) 「日本人学生による留学生の会話行動の評価—中国語を母語とする中級・上級日本語学習者との初対面会話の場合—」『日本語教育方法研究会誌』(16-1), pp.62-63.
- [2] 小松翠 (2016) 「中国人留学生の友人関係不満に関する原因帰属と日本人イメージの関連について」『高等教育と学生支援: お茶の水女子大学紀要』(7), pp.128-139.
- [3] 張瑜珊 (2006) 「台湾と日本の女子大生同士における初対面会話の対照研究:話題選択について」『言語文化と日本語教育』第 31 回お茶の水女子大学日本語文化学会研究会発表要旨 (31), pp.110-113.
- [4] 趙凌梅 (2014) 「話題選択スキーマとストラテジーの日中対照研究:初対面会話データを用いて」『国際文化研究』(20), pp.145-157.
- [5] 方敏 (2020) 「初対面以降の会話における話題選択及び変化に関する一考察—日本人女子学生による初対面から4回目までの会話をもとに—」『ことば』(41), pp.89-105.
- [6] 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析」『日本語教育』(103), pp.49-58.
- [7] 山本恭子・鈴木直人 (2008) 「対人関係の形成過程における表情表出」『心理学研究』(78-6), pp.567-574.
- [8] 楊虹 (2011) 「日中母語場面の初対面会話における話題開始の比較:参加者間の相互行為に注目して」『立命館言語文化研究』(22-3), pp.185-200.
- [9] 渡部敦子 (2018) 「「二度見知り」はなぜ生じるか?」『日本心理学会大会発表論文集』第 82 回大会, pp.3EV-013.